

ヒロハテンナンショウ *Arisaema ovale* Nakai var.

【評価理由】

個体数階級 3、集団数階級 4、生育環境階級 3、人為圧階級 2、固有性階級 3。総点 15。温帯性で日本海側に多い植物で、愛知県では生育地も個体数も極めて少ない。

【形態】

多年生草本。地下茎は扁球形、まわりに多数の子球をつけ、上部から多くの根を出す。葉身のある葉は 1 個、葉鞘は長さ 20~40cm、葉身は鳥足状に分かれ、小葉は通常 5 個、稀に 7 個、葉軸が短いため互いに接近してつき、長楕円形、先端は鋭尖頭、辺縁は全縁である。花期は 5~6 月、仏炎苞は緑色、葉と同時に開き、葉より低い位置につき、筒部は長さ 3.5~6cm で縦の隆起条が目立ち、口辺は狭く開出し、舷部は卵形、長さ 4~9cm、中央部はあまりふくらまない。花序は肉穂状、偽雌雄異株で、小型の個体は雄花、大型の個体は雌花をつけ、付属体は円柱形、先端は直径 2~7mm である。

【分布の概要】

【県内の分布】

東：2 豊根 (芹沢 51690, 1989-5-27)。茶臼山周辺に生育するだけである。

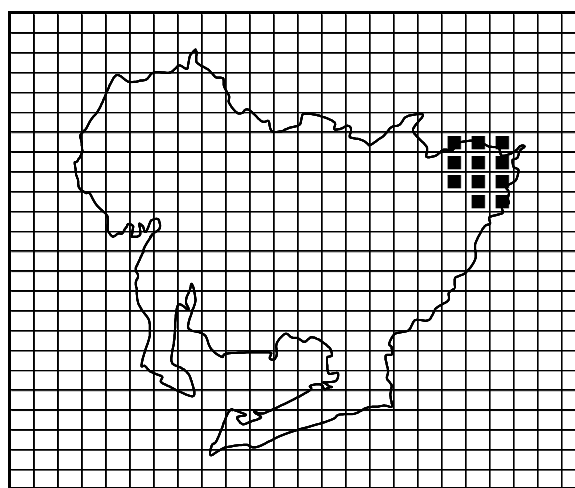
【国内の分布】

北海道、本州 (日本海側に多い)、九州北部。

【世界の分布】

日本固有種。

要配慮地区図



【生育地の環境／生態的特性】

山地の林内に生育する。

	山地	丘陵	平野	海浜
森林	○			
草・岩				
湿地				
水域				

【現在の生育状況／減少の要因】

生育範囲は狭く、個体数も少ない。特定の場所に小群落があるだけという生え方ではないため、1 回の工事等により壊滅的な打撃を受けることはないが、全体的な自然環境の劣化によりいつの間にか消滅してしまうおそれがある。

【保全上の留意点】

茶臼山周辺は、愛知県では温帯性植物が集中して生育しており、生物多様性を保全する上で極めて重要な場所である。自然とのふれあいの場を確保するという意味でも、現在以上の開発は避けるべきである。

【特記事項】

本種は一般に $n=52$ の 4 倍体植物であるが、愛知県産の本種は 3 倍体である (芹沢 1981)。そのため、固有性階級が 3 と評価されている。ヒロハテンナンショウと名づけられているが、他種に比べ小葉が特に広いことはない。アシウテンナンショウ var. *ovale* から変種の階級で区別した場合、学名は未考証である。

【引用文献】

芹沢俊介, 1981. 日本産テンナンショウ属の再検討(4) ヒロハテンナンショウ群とシコクヒロハテンナンショウ群. 植物分類地理 32: 22-30.

【関連文献】

保草本Ⅲ p.201, 平草本 I p.132, 平新版 I p.97, SOS 旧版 p.102.